



を活かした教育法を創案して1907年に実験キャンプを実施します。

このキャンプの成功を基に翌年1908年に発行した「Scouting For Boys」によってボーイスカウトの活動が広く青少年に受け入れられ、彼が提唱する野外での活動やパトローリングといった青少年教育法が世界に伝播して行くことになります。

3. 鹿児島とボーイスカウト運動との縁

ボーイスカウト運動の情報を得た当時の文部大臣牧野伸顕（大久保利通の次男）は1908年にベルギー大使の秋月左都夫に調査を命じ、広島高等師範を中心に研究が進められます。1910年にイギリスから帰還した文部省督学官蒲生保郷の桂首相への建白によって1911年には活動が本格化します。

また、当時学習院の院長であった乃木希典もこの運動に感銘して学習院でボーイスカウトの教育法に習ってキャンプなどの野外活動を行っています。この乃木希典から薫陶を受けたのが、第4代総長の三島通陽でした。

三島通陽の祖父は西郷・大久保から見出された三島通庸。通陽は大山 巖の娘信子と通庸の子で初代日銀総裁の三島弥太郎の子で大

山 巖の孫ということになります。

第5代総長の渡邊 昭は同じく大山の娘留子と渡邊千春の子で通陽とは従兄弟になります。

大山 巖は西郷隆盛の従兄弟にあたり、孫の三島が乃木希典の薫陶を得てボーイスカウト運動を推進しました。そのボーイスカウト運動は大久保利通の次男牧野伸顕によって日本にもたらされたものでした。我々鹿児島のスカウト運動に関わる者は鹿児島とボーイスカウト運動とのただならぬ縁のようなものを感じずにはられません。

4. ボーイスカウト運動は郷中教育を参考にしているのか

以前から鹿児島の郷中教育関連の話や観光案内にボーイスカウトは郷中教育を参考に作られたと紹介されることがあります。

これは、1911（明治44）年6月イギリス国王ジョージ五世の戴冠式に明治天皇・昭憲皇太後の御名代として派遣された東伏見宮御夫妻に随行した陸軍大将の乃木希典が、戴冠式のあとロンドン・ハイドパーク広場でボーイスカウトの訓練を見学します。そこで、乃木大将はベーデン・パウエルに「こんな素晴らしい

い組織を如何にして創られましたか」と尋ねました。パウエルは、「この制度は、薩摩の郷中教育を調べ良い点を斟酌して組織したものです。」と応えたということです。

この逸話は、軍人ベーデン・パウエルが極東の小国日本のそのまた南端の薩摩がイギリス海軍と戦い、それを撃退したことに興味を持ち、その薩摩の青少年育成法を参考にしたのではないかという想像補足まで生まれています。

この、ロンドン・ハイドパークでの出来事は鹿児島市長であった上野 篤が著書「健児の社」に右記のように著しています。

5. 郷中教育以降の青少年教育

明治になって尋常小学校が作られ、郷中教育は近代の教育システムに移行して行く一方、郷中教育の延長と言える「(学)舎」が組織されます。

そのような中、後藤新平初代総長のもと、関東大震災でのスカウトの活躍もあって、ボーイスカウトの認知度が上がりこの運動に準拠した少年団が全国に広がって行きます。

鹿児島市でも1925(大正14)年に「鹿城少年団」が発足します。鹿児島市長が団長となってボーイスカウトの教育法による活動が展開されています。

この少年団は「学舎」に通えない子どもたちの受け皿として設立されました。

1945(昭和20)年の終戦を機に新たに組織化されたボーイスカウト運動がスタートします。ボーイスカウト運動の創始者ベーデン・パウエルが郷中教育を手本にボーイスカウト教育法を創案したという事実はなく、あくまでも乃木希典に関連する記録を基にした推察の域を出ていません。

乃木とベーデン・パウエルとの親交はその後も続き、ボーイスカウト教育法を取り入れた乃木の思いは皇孫にも伝わります。



ハイド・パークにて左から2人目B.P.,
右から2人目乃木大将



健児の社の教育は、古代希臘のスパルタに於ける硬教育に類似し、武士道的精神を該教育の眞髓として居るものであることは、おそく世人の知悉して居るところであると思ふ。近年、歐米各國に於て風紀作振上甚だ有益なることと認められて居るところの「ボーイスカウト」の操練を故乃木大将が英京倫敦の郊外に於て參觀せられた際に、「實に結構な組織ではある、如何にして斯る良制度が工夫創始せられしものなるか」との大将の讃辭に對して創始者たるパウデン・パウエル將軍は「閣下には御承知なきか、これは貴國薩摩に於ける健児の社制度を研究しその美點を斟酌して組織したるものに外ならず」と答へたので、大将は自己の無知に赤面しながらも、我國にも他國の模範となるべきものあるのに内心大に誇を感じられたといふことであるから、つまり「ボーイスカウト」の模範は我健児の社が提供したこととなるのである。

健児の社教育の薩摩に及ぼせる影響を歴史上の事實に照して觀ても、幕末世論紛争の際よく藩論を統一して一致團結し、互に左提右拂して、大義を執つて動かす、遂に維新の改革に當つて數多の賢相名將を出したのも多く此健児の社即ち郷中制度の賜で

自
序
三

东北市史

II



東宮御所でのキャンプ
ボーイスカウト日本連盟機関誌「スカウティング」
2019年5号より転用

時代は移りその時々^①の社会のニーズに対応したスカウト教育の展開が求められているなかスカウト運動が生まれた時代やこれまでの流れを振り返ることは、この運動の普遍的な目的を理解する上で必要なことと考えています。

鹿児島ボーイスカウト関係者は100年に及ぶスカウト運動と薩摩との縁を誇りに多くの先達の情熱や思いを受け継いで行かなければならないと思っています。

< 参考・出典 >

- ・ボーイスカウト日本連盟「日本ボーイスカウト運動史」
- ・元鹿児島大学名誉教授北川鉄三『薩摩の郷中教育』
- ・元鹿児島市長上野篤「健児の社」
- ・鹿児島市編纂「鹿児島市史」

寛城少年団は、大正十四年（一九二五）五月三日に、初めて編成された上野神社。ちなみに、ボーイスカウト（Boy Scout）は、イギリスのパウエル將軍（Baden Powell）が、一八九八年に英國少年の身心を鍛練する目的で創立した団体である。わが国では、後藤新平が、大正十二年に日本少年団と初代總裁に就任した。パウエル將軍は乃希典將軍に対して、薩摩の健児の社の制度、すなわち、郷中教習と令舎を研究してその真諦を採つて、これを組織したと答へたと云う^{同上}。寛城少年団は、鹿児島市の少年神を研究しに通じぬものために、「ボーイスカウト」の形式を採用して、郷中古色彩ある健児の社の精神を広く普及し、もつて寛城少年の精神的修養の機関として設立した。寛城少年団は本部と各分団を設け、本部は鹿児島市役所に置き、团长一名、市長、鹿兒島・理事長一名、市助役、鹿兒島・副理事長、各々分団長、各班長の役職を置いた。^{同前}

第四編 教育
第九章 社会教育
第九八五
第九八六

大正10年には皇太子裕仁親王殿下（昭和天皇）がベーデン・パウエルを引見されイギリスのスカウト運動の話を聞かれ大いに興味をもたれました。また、皇太子徳仁親王殿下（今上天皇）は国外でのご公務と重なる次期以外はほぼ毎回、日本スカウトジャンボリーにご台臨になり、スカウトと親しく交流され、1982（昭和57）年には東宮御所内でスカウトキャンプを実施されるなど、ボーイスカウト運動に深いご理解を示されています。昭和天皇のご学友であった、渡邊昭第7代総長やその息子の渡邊允侍従長など、鹿児島ゆかりの人々の存在も浮かび上がってきます。